太鼓打ち

祭りは一人前の男へと成長させてくれるもの。

長崎の祭り

美しい海に囲まれた脇岬町。この静かな漁師町の男たちが一年に一度、熱くなる日がある。別名「けんか祭り」と呼ばれる「脇岬祇園祭」だ。

祭りが始まったのは一七八五年。流行病に襲われた村人たちが、祇園山に神社を建て、祭りを行ったところ、病が終息したことから、毎年、行われるようになったという。一八六二年に当時この地を治めていた深堀の殿様の発案で大名行列が取り入れられ、現在の形となった。

祭りはお下りとお上りの二日間行われ、両日共に路地には、行列を今か今かと待ちわびる人の姿が見られる。祭りの花形ともいえる「太鼓打ち」の若さみなぎる姿や、「下馬」と呼ばれる緊張感漂う「挟み箱」を受け渡す所作など、皆、次から次に登場する男たちにくぎ付けだ。祭りの盛り上げ役を担うのは「バンバ振り」と呼ばれる人々。「この町は美人が多かね～っと」などと大声を張り上げながら、纏のような「バンバ」を手の平に立てたまま激しく回すと、路地には笑い声と拍手が湧き起こる。

バンバ

祭りの終盤、クライマックスは意外な形で訪れる。その年の当番町が翌年の当番町へ挟み箱を引き継ぐ「受け取り渡し」をきっかけに、挟み箱を早く渡したい当番町と、わざと知らぬふりをしてなかなか受け取ろうとしない翌年の当番町との間で、争いが起きるのだ。狭い路地で、男たちは怒鳴り合いながら、殴り合いを始める。けんかは真剣勝負。熱気にあふれた男たちの争いを目の前にし、観客は異様な興奮に包まれる。太鼓と笛の音が鳴り響く中、けんかはどんどん盛り上がっていく。

しかしけんかといえど、ルールはある。素手で行うこと、そして後腐れなく一切禍根を残さないこと。男たちはこのルールの下で、一年に一度のけんかを思い切り楽しむのだ。けんかが行われるのは約十五分。世話役の指示によって、終了となり、祭りも幕を下ろす。

この強烈な祭りのフィナーレを見ようと、毎年、多くの観光客が訪れる。しかし地域の人にとってけんかは、おまけのようなもの。この町の男たちは、大人の仲間入りの証として太鼓を叩き、その後、年を重ねるにつれてバンバを回し、下馬を覚える。祭りは、神事を通して一人前の男へと成長させてくれるものなのだ。だから地域の人たちは、行列に「よか男～！」と声を掛ける。男たちの真剣なまなざしと情熱がこの祭りと町を支えていた。

下馬